

# 手賀沼が海だったころ

会創立 20 周年を迎えて

当会役員 小柳満雄さんに聞く



## 当会が出来るまでと出来た頃

当会は、1999年9月26日に設立され、この9月で創立20周年になります。会が設立される前ですが、1999年6月13日には歴史シンポジウム「手賀沼が海だった頃ー松ヶ崎城と中世の柏北域」(注1)が開催され、市民・研究者に松ヶ崎城に関する関心が高まる中、9月26日に、有志10人で当会が発足しております。ただ会報等でも、詳しい設立の経緯は今まで余り書いておりませんでした。

そこで、会設立当初から数々の役職に就かれ、現在も監査として会の役員をしてられる小柳満雄さんに、当会が出来るまで、また出来た当初のことを当時の資料を見せて頂きながらうかがいました。



<2006年7月松ヶ崎城跡で>

### 1. 当会が出来るまで

一手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会ができるきっかけは、どのようなことだったのでしょうか。

「ちょうど、スタジオ WUU をつくる時、鈴木さん(鈴木英夫前会長)と同郷のミュ

ージシャンがいて、その人のパーティのようなものがあって、鈴木さんと私の席が一緒になりました。そんな時に、地域の話をはじめている中で、松ヶ崎の話が出てきたのです。

私も、松ヶ崎城について、ほとんど知らなかったのですね。うちも松ヶ崎城の近くに親戚があって、その子供たちが七つのお祝いなどの時、あそこにある松ヶ崎不動尊にお参りに行く習慣があって、そのくらいのことしか知らなかったのです。

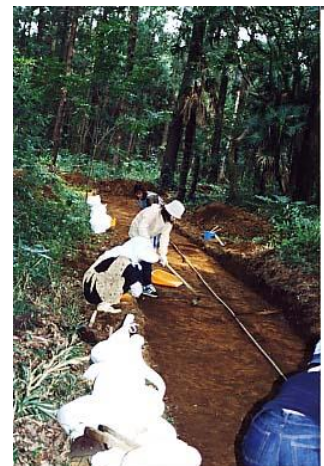
それが地元の人が持っているのだけれど、どうも競売になりそうだと、しかしあの場所は残しておくべきだという話を聞いて、それから4、5日してスタジオ WUU がオープンになりました。その時、鈴木先生を青山さん(青山茂元会長、故人)のグループに会わせてたのです。

みな案外と松ヶ崎城の知識はなかったのですけれど、鈴木さんの話を聞いて、これは残すべきではないかというようなことになって、それで何回か会議をもって、とにかく関係者に会いに行こうということで、私と青山さんとで行ったわけです。

そのうち、保存について話が少し進み、市長にも掛け合ったりして、進んできたのです。」

ー鈴木さんは、なぜ松ヶ崎城のことを知っていたのでしょうか。

「鈴木さんも地方史を色々勉強されていたので、松ヶ崎城のことを知っていたのでしょ。それで、仲間先生を呼んで、講演会を開催したり、色々始めていった訳です。その辺のことは、前の会報などにも書いてあります。」



<松ヶ崎城跡確認調査(2002年)>  
画像は柏市教育委員会所蔵

(注1) 歴史シンポジウム「手賀沼が海だった頃ー松ヶ崎城と中世の柏北域」は、1999年6月13日に柏中央公民館で、鈴木英夫氏をコーディネーターに遠山成一氏、川尻秋生氏、鈴木哲雄氏、中山文人氏を講師として開催されました。研究者や市民あわせて70人の参加、その内容は翌年に書籍化されました(『手賀沼が

海だった頃』(2000)  
たけしま出版)。

## 2. 会の初期の活動

—20年前は会にいなかったものですから、いろいろお聞きしたいのですけれど、当時の会の様子はどうだったのでしょうか。

「私も書類がいっぱいで、今整理しているのですが、商店街、街づくり、趣味のものとか、その中で会の初期の頃のもので出てきたのです。川上さん(川上利男氏、初代会長・故人)の挨拶とか、それから本を作った当時の資料が出てきました。」

—本を作ったのは2000年くらいですね。

「ええ。ビデオも作りました。(書類を示して)こういう保存の要望書(注2)を作り、川上さんから市長に出したのです。」

—(要望書と一緒に出された研究者等の賛同者名簿を見て)遠山成一先生とか、大勢賛同されたのですね。何人が存じあげた方もいます。

(注2) 柏市長宛に出した保存  
要請書は以下の通り

「平成14年6月3日  
柏市長 本多晃様  
手賀沼と松ヶ崎の歴史を  
考える会会長 川上利男

松ヶ崎城址及び周辺森林  
の保存のお願い

柏市松ヶ崎城址及びその周辺につきましては、これまで所有者の方々のご理解とご努力があってほぼ自然のままの姿を保ってまいりました。(略)この土地につきましては、下記の事由によりぜひとも保存されるべきかと思われまします。柏市におかれましては、松ヶ崎城址および周辺森林保存のためにご尽力いただきますようお願いいたします。当会といたしましては県内を始めとする関東地域の中世史、中世城郭研究者の賛同者名簿を添えて要請する次第です。

記

### 歴史的重要性

当地は手賀沼湖畔にあり、手賀沼を北西方向から一望する位置にあります。土地内には前方後円墳と推測される墳墓がある他、室町～戦国時代の城跡が残されておりまします。中世期の城跡については柏市内では増尾城址を始めいくつかの城址がありますが、松ヶ崎城址のように周辺の景観を併せて昔の姿をとどめている城址は見ることができなくなっているのが現状です。(略)

### 自然環境としての重要性

松ヶ崎城址と周辺森林は手賀沼、呼塚、松ヶ崎と続く緑のチェーンの上にあります。しかし、開発によってこの緑のチェーンはところどころが切断されています。幸いにも柏市の「緑の基金」による斜

面林の保護などにより、一部は保全されていますが、開発が続く中で予断を許さない状況が続いております。(略)

以上のような歴史的価値と自然地域とともに環境としての重要性を併せ持つ松ヶ崎城址の保存を要望するものです。」

(香取の海の図を見て)

「この辺はずっと、『香取の海』とっていたのですね。手賀沼と印旛沼や霞ヶ浦などもつながって、一緒になっていたのですね。ここ(鹿島神宮から香取神宮へ行くための香取の海の渡し)を渡るとき、風雨がすごくて滞在していたという記録(注3)もあります。」

(注3) 藤原光俊の和歌に「波あらし かつりのうみのゆふしほに わたりにかたるよをなけくかな」(『夫木和歌抄』巻二十三)とあり、香取の海を渡ろうとして風雨のために足止めされたというのが、康元元年(1256)11月の和歌に詠まれています。



『手賀沼が海だった頃』(たけしま出版)p59より作図

(松ヶ崎城跡付近の航空写真をみて)「これは松ヶ崎です。」

—まだクレストマンションが建つ前の写真ですね。

「城跡はこちらか。国道6号線と大堀川と…大堀川などは分かります。」



<航空写真を見ながら>

「松ヶ崎城跡を調査したときの写真も持っています。柏市が発掘調査してくれました。2004年でしたか。これは、その頃の市の見学会資料です。」

—市の方で、きちんと見学会資料を作ってくれていたのですね。

「(名簿を見ながら)この頃(2003年)はこんなにメンバーも多かったのです。2000年には、会報の創刊号を出し、遠山先生に講演してもらったりしました。その後、2002年11月発行の産経新聞に『柏の団体が買い上げ求め署名運動』なんて書いてありますが、保存の話が新聞に取り上げられ、会に来てくれる人も増えたのです」

—(松ヶ崎城)リーフレットを

見て) その漫画みたいな絵は、誰が描いたのですか。



<リーフレットの挿絵>  
飯泉志穂氏画

「飯泉さんと書いてありますね。」

—いまだに、そのリーフレットの絵は使っています。中身の文章は変えたのですが。

「そうですね(笑)。こういうリーフレットなどは会で作ったのですが、会長は川上さんがやってくれて、こういう企画など会員で頑張ってくれた人がおりました。」

—保存に対して、市はどんな考えというか、反応でしたか。

「最初は全然なかったですよ。けど何度かお願いして、結局残しておいてもらうようにしたのです。」

### 3. 松ヶ崎不動尊の絵馬

「松ヶ崎城跡(その腰郭に建立された松ヶ崎不動尊)にあった絵馬は、みんな燃えてしまったのだけれども、写真だけ残っていて、複製を作ろうじゃないかということで活動していた(注4)のですが、(参考に

なるところを)紹介してくれた方がいました。

その方は、成田山の靈光館の主任調査員の小倉博さんを訪ねて行ってくださいと、手紙をくれました。あの絵馬の絵のなかで、人力車が何か車が描かれています。人力車ですかね。結構古い絵ですから、そういう人に聞けば分かるのではないかという助言だったのです。」

—成田山でそういうことをやって、その経験があるので、聞きに行ったらどうかということですか。

「そうですね。画像だけで復元しようとしていましたので。あれを見ると、あの絵の中には、旅館(茶屋)のようなものもありますし、松戸に映画監督がいて、それをテーマに映画を作ろうじゃないかという話もあって。」

—旅館というのは、お不動さんの下のですか。

「そうです。松ヶ崎不動尊絵馬には動画の絵になりそうなイメージのものもありそうなので、それをテーマにしてどうだろうなんて話があって、何度か打ち合わせしています。」



<焼失前の松ヶ崎不動尊>  
画像は柏市教育委員会所蔵

-----  
(注4)

絵馬の複製については、新聞でも取り上げられました。

読売新聞 「大絵馬、写真で復元 明治初期の手賀沼伝える 柏の郷土史研究会＝千葉」

2001.10.17 東京朝刊

「◆松ヶ崎不動尊で5年前焼失の13点

柏市内の郷土史研究グループ『手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会』（川上利男会長、会員七十人）が、五年前に火災で焼失した同市松ヶ崎の松ヶ崎不動尊の絵馬十三点を写真で復元した。復元された絵馬は今日二十一日、同市中央公民館で展示される。

同会は、絵馬を通じて地元の歴史に興味をもってもらうと、昨年九月に結成された。同会によると、松ヶ崎不動尊は幕末の一八五五年ごろ建てられ、当時の村人たちの信仰を集めたという。

建物には、明治初期、近郷近在の人々が奉納した『参拝図』『平将門、藤原秀郷合戦図』『倶利伽（くりか）羅（ら）剣』などの絵馬がかけられてあったが一九九六年六月、ホームレスの失火により、不動尊は建物も絵馬類もすべて焼失したという。

同会が鎌倉時代から戦国時代にかけて、水陸交通の要衝であった手賀沼に臨む丘にあった『松ヶ崎城』跡を調べているうち、城跡の一角にあった松ヶ崎不動尊に注目した。柏市教育委員会が絵馬の写真ネガ（八四年

撮影）を保存していることを知り、コンピューターで実物大に近い拡大写真に再現した。

復元された絵馬の中には、明治初期の手賀沼周辺の村の様子を描いた『不動尊風景図』（縦約八十センチ、横約一・六メートル）もある。不動尊前には茶店や石段、参けいの人々、主要道の水戸街道には人力車、牛、手賀沼には荷を運ぶ帆掛け船、魚を取る舟などが描かれ、同会では『当時を視覚的に知ることのできる唯一の貴重な史料』と話している。」



<松ヶ崎不動尊風景図絵馬（明治初年の作とされる）>

画像は柏市教育委員会所蔵

## 4. 地域とともに

—以前、会員でもともと城跡近くに住んでいた旧住民の方もおられました、あの城跡の周辺の古い家の方たちは、古くからお住まいだったのですね。

「そうです。城跡のある台地上にも、古い家はあり、

うちの親戚もおりますが、もともと地元に住んでいた方たちです。」

—今、借上げ公園として看板が立ち、市は毎夏に草刈、また当会は秋に松ヶ崎城祭りを行っていますが、もう少し何かイベントができればと思います。地元の旧住民の方が、参

加してもらえれば、違ってくるかな。

「そうですね。地元の古い住民の人たちが入ってくれば、変わってくると思います。」

—本日は、お忙しいなか、ありがとうございました。

## 4月の総会、講演会等の報告

## ● 手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 2019年度総会

・日時：2019年4月29日（祝・月）10時30分～11時30分

・場所：アミュゼ柏 4F 音楽室

2018年度事業報告、2019年度事業計画、予算等全て承認されました

● 講演会「柏飛行場と航空部隊」  
(後援：柏市教育委員会)

・日時：2019年4月29日（祝・月）13時30分開場、14時～16時

・場所：アミュゼ柏 1F プラザ

・内容  
テーマ「柏飛行場と航空部隊」

講師：森 伸之（軍事史学会会員）

司会：富澤 美奈子

・参加者 80名

柏飛行場は日中戦争開戦後に開設された陸軍飛行場で、調布、成増、松戸、印旛などとともに「首都防衛」の飛行場として位置づけられました。今回、防空に関する考え方、柏駐屯部隊の変遷や実際に駐屯していた戦隊の元隊員からの聞き取り内容が語られ、さらに遊んで陸軍航空教育などにも触れられました。

戦争末期には、高高度を飛ぶ米軍機を迎撃するために、ロケット戦闘機秋水が開発されたが実用化に至りませんでした。そして東京大空襲など、首都圏を含め大きな空襲の惨禍があり、ついには敗戦となりました。

当日は手話通訳付きで、多数の来場がありました。

-----  
他に柏市民活動フェスタ2019(2019年5月12日(日))で講座「柏周辺の戦国史」、カシニワ・フェスタ2019(2019年5月19日(日))で松ヶ崎城跡見学会も実施しました。

9/22 当会創立20周年記念  
講演と朗読劇の集い「中世城郭を探る  
～東葛、そして常総へ」

・会場：アミュゼ柏 1F プラザ（柏市柏6丁目2-22）  
⇒ アクセス：柏駅東口より徒歩7分

・日時：2019年9月22日(日)  
12時開場、12時半開演  
～16時20分くらい

・講演1：「考古学からみた東葛の城館—発掘調査20年の歩みと課題—」

(講師：間宮 正光氏(日本考古学協会会員))

・講演2：「柏市域・周辺地域の城跡に見る中世城郭の発達」(講師：佐脇 敬一郎氏(柏市史編さん委員会参与))

・朗読劇：「箕輪城の女城主・ひめわか日女若ものがたり」(ふるさと舞台化プロジェクト)

・参加費：500円(資料代など)

・その他：申込不要。駅から近いのでなるべく電車などでお越しください。

お問い合わせ メール：  
info@matsugasaki.jo.net

## 郷土史の窓

# 千葉氏と千葉・東葛(3)



### 3. 千葉氏成立以降、各地にあった千葉氏関連城館

◆千葉氏の居館(千葉市中央区中央など)

さて、千葉氏の日常居館は、現在千葉地方裁判所がある場所にあったといわれる。千葉地方裁判所の場所は、都川に程近い平地であるが、かつて「御殿跡」といわれ、明治期までは土塁、堀が取り巻いていた。堀は当時、水田として耕作されていたという。現在は遺構が残っていないが、明治15年の地図にも載っていた土塁や堀の遺構から見て、1辺約100mの中世の方形居館であることは間違いなく、千葉氏の館であった可能性が高い。建武2年(1335)千葉氏宗家から九州へ赴き、九州千葉氏となった千田大隈守胤貞が、陸奥国行方郡の相馬一族の相馬親胤とともに下総奪還を目指してか「千葉楯」に攻め寄せている。この「千葉楯」とは千葉城、いわゆる猪鼻城ではなく、上述の千葉氏居館であった可能性が高い。なお、千葉館が館として機能していたのは鎌倉時代初期からではなく、南北朝期の当主千葉貞胤の頃からと思われ、都川の水運を使って、東京湾を経て鎌倉などとの往来を行っていたのであろう。

諸豪の城館も各地に築かれた。千葉氏関連の下総地

方の主な城館は、以下の通り。

＜千葉氏の本拠＞

千葉氏は、以下の城を居館、居城とした。

・千葉館など(康正元年(1455)以前) 千葉氏嫡流平常重? ~ 千葉胤直

・本佐倉城(文明年間(1486頃?)以降) 馬加系千葉氏 千葉孝胤 ~ 千葉親胤

他に馬加系千葉氏が本佐倉城に移る前に、平山城(千葉市緑区)や長崎(場所不明)に拠ったという説がある。

佐倉城は鹿島城のあとに、千葉邦胤が築いている途中で大名としての千葉氏は滅び、江戸初期に土井氏が完成させた。

＜千葉六党の城館＞

千葉常胤の子らは、下総の各地に散って多くの子孫を残していった。こうした千葉氏から出た分家諸家の城館址も、各地に残っている。

太郎胤正は宗家として千葉庄、千田庄などの下総の所領を継承、千葉を本拠とする。

相馬次郎は相馬御厨を継承し、相馬氏は代々千葉県北西部にあたる手賀沼を挟んだ南北に広い地域を治め、相馬氏関連の城館址がその地に残っている。後に相馬氏は奥州と下総に分立し、陸奥国行方郡(現在の福島県

南相馬市など)周辺と手賀沼の北部の守谷を中心とする地域に拠点移した。

武石氏は武石郷周辺、大須賀氏、国分氏、東氏は香取郡の各地に城館を築いた。現在も遺構が明瞭に残る城址は少ないが、香取郡の各地、小見川町あたりにはかなりの数の城館址が残っている。首都圏では、国分氏の国分城(館)が、市川市国分の国分寺近くに残る。

＜臼井氏の城館＞

千葉氏の一族で、下総地方の現在の佐倉市、四街道市、船橋市、八千代市に及び広大な地域を領有した臼井氏は特筆すべき存在であった。

臼井城は、千葉城、本佐倉城と並ぶ下総地方の雄城であるが、その臼井氏が築いた城である。臼井城周辺には、衛星状に、砦がつくられていて、臼井城の防備を固めている。

＜原氏・高城氏の城館＞

原氏は千葉氏の分家から出たいわゆる族臣であるが、室町、戦国と時代が移るにつれ、千葉氏をしのぐ実力をもち、生実城や前述の臼井城も戦国期に支配下においた。原氏の重臣であった高城氏は、上総武田氏によって生実城が攻められた時に脱出し、現在の千葉県東葛飾地方に拠点を移し、小金を中心により一帯を支配した。

高城氏の居城は小金大谷口城であるが、現在の東京都東部にも勢力を伸ばしていたようで、原氏とともに後北条氏の部将という位置付けで、国府台合戦にも参加しているのが注目される。



<都川と千葉館跡推定地>

◆下総国府近くの千葉氏居館と国分館(市川市国府台/国分)

鎌倉初期の千葉氏の館としては、千葉介常胤は、下総権介として下総国府周辺に居館を構えていたと思われる。『吾妻鏡』治承四年(1180)九月十七日条の「千葉介は子息太郎胤正、次郎師常、三郎胤盛、四郎胤信、五郎胤通、六郎大夫胤頼、嫡孫小太郎成胤等を相具して下総の国府に参会す。従軍三百余騎に及ぶなり」という、有名な源頼朝との国府台参会は、まさに下総国府近くで行われた。下総国府の場所は、市川市国府台のどこかにしても正確な場所が長年わからなかったが、最近の和洋女子大の新校舎建設に伴う発掘調査で、和洋女子大敷地から国府址と思しき建物の遺構の一部や墨書土器も発見され、その近辺に存在したことが確かなものとなった。

さて、千葉介常胤の居館

もその国府近くにあった筈であるが、その場所も不明である。千葉氏の本拠としての地は、千葉常胤の父常重の代から千葉庄であったが、平安時代末から鎌倉時代の初め頃は国府、国衙のあった国府台が下総における政治の拠点であったと思われる。そこには下総守護に任せられた千葉氏の守護所もあったのであろう。その付近にあった居館が後世の市川城となり、そこは下総権介としての千葉氏の居城であるとともに、何か有事の際に千葉氏が兵を率いて立て籠もれるような城であったのであろう。おそらく下総国府の近く、国府台のどこかに、当時の様式通り単郭方形の館として築かれたと思われる。千葉氏は常兼・常重のころから、在庁役人「下総権介」として、下総国府近くに居住していたと思われ、官牧、国分寺領の管理をしていたらしい。千葉介常胤の五男である国分五郎胤通は、「下総権介」である父の仕事を手伝い、国分寺領の経営を行っていたと見られる。

その国分五郎胤通が住んでいた国分館であるが、それもまた場所が明確ではない。但し、市川市国分には、いわゆる、国分城址がある。国分城址は、国府台から東へ六反田谷津を挟んだ国分台地上にある。その台地の東には、国分川が流れる低地が広がり、その低地を挟み東側には曾谷館址のある曾谷の台地がある。国分城址は下総国分寺の周辺にあり、国分台地の南端に位置し、その台地と南の低地の出入口には石塔坂がある。

この国分城址の位置であるが、下総国分寺の南西端には、L字状の土塁痕が存在し、国分寺の敷地内にも一郭があったことがわかる。また国分寺の南東約150mの台地端に土塁、櫓台、虎口址がある。但し、国分寺敷地内の土塁は古い館址に起源を持つかもしれないが、現在残っている遺構は、戦国期のものである。

治承4年(1180)8月石橋山合戦で一敗地にまみれた源頼朝が下総に逃れた後、下総国衙の目代平重国を千葉氏が討ち取ると、国府、国分寺の周辺を千葉氏が押さえた。

「吾妻鏡」治承四年九月十三日条に、千葉常胤が一族郎党を率いて目代館を襲撃し、東胤頼が目代を討ち取った様子が記述されている。

その後、千葉介常胤から、「下総国葛飾郡国分郷」すなわち国分の地は、千葉介常胤五男である国分五郎胤通が受け継ぎ、名字の地とした。胤通は早くから、下総権介である常胤を下総国衙にて補佐などとして助けていたと思われ、国分台地北部にあった馬牧や市川津の管理もしていたらしい。

現在遺構の残る国分城址は、前述の通り戦国期のものである。国分五郎胤通の頃の国分館は、国分寺の近くであったにせよ、平安末から鎌倉初期当時の居館が一般的にそうであったように、低地近くの台地の立上り端あるいは台地中段にあったのであろう。



<下総国分寺にある土塁>

◆鎌倉の千葉氏居館(鎌倉市長谷)

鎌倉幕府の有力御家人である千葉氏は、鎌倉にも当然居館を構えていた。千葉常胤の居館については、現在の鎌倉市役所の北隣、スーパー紀伊国屋のある御成町辺りか、材木座4丁目に相当する弁ヶ谷東方ともいわれ、どこにあったか不明である。なお、弁ヶ谷は、正しくは別ヶ谷といい、「鎌倉別駕谷」という千葉介の「介」の唐名「別駕」に由来する地名であるという。何れにせよ、千葉常胤の鎌倉居館の場所は明確には分っていない。但し、その嫡孫成胤の居館は甘縄にあったことが、『吾妻鏡』などの資料からも分かっている。

『吾妻鏡』には「建暦3年(1213)二月大十五日丙戌天霽千葉介成胤生虜法師一人進相州是叛逆之輩中使也(信濃國住人青栗七郎弟阿静房安念(云々))爲望合力之奉向彼司馬甘縄家處依存忠直召進之(云々)」とあり、源頼家の遺子千寿丸を擁して幕府に謀反を起こそうとしていた、泉親衡の家臣青栗七郎の弟で阿静房安念という僧が協力を依頼し、千葉氏の甘縄の館に来たところを生捕りにし、直ちに幕府に突き出したという和田義盛の乱に繋がる逸話をのせている。この「司馬甘縄家處」とは千葉常胤が源頼朝に「すべからく司馬を以て父となすべし」という有名な言葉の通り、「司馬」といわれたことから、司馬すなわち千葉氏の甘縄館という意味で、千葉氏の鎌倉における館は、成胤の代には甘縄にあったことがわかる。

甘縄は現在の鎌倉市長谷一帯で、長谷寺や甘縄神明宮のある高台からは由比ヶ浜や低地にある街並みが見渡せ、居館があったと思しき台地下は風をしのげて、稻

瀬川が堀代わりになっていたのであろう。安達盛長の邸宅も、甘縄神明宮のある高台のすぐ下にあった。なお、相馬氏の始祖師常が勧請した相馬天王社は、鎌倉扇ヶ谷に近い今小路沿いにあった。その近辺に相馬氏邸宅があり、臼井氏邸宅は材木座の光明寺辺りにあったという。



<千葉氏の館があった鎌倉市長谷、写真は甘縄神社付近～安達盛長邸跡>

(参考文献)『千葉氏 鎌倉・南北朝編』千野原靖方(1995)  
「中世の千葉～千葉堀内の景観について～」築瀬裕一『千葉いまむかし』No13 ほか

(続く)

## お知らせ

### <会費納入のお願い>

なかなか講座等への出席ができず、会費未納となっている会員の方もいらっしゃるかと存じます。なるべく早めに会費納入をお願いします(下記銀行口座への振込など)。

### <会誌「水辺の城」第3号発行しました>

遅くなりましたが、この6月21日に会誌「水辺の城」第3号を発行しました。

### <原稿募集>

紀行文や写真、イラストでも、地域の歴史、自然に関わることであれば、何でも結構です。Eメールの場合は info@matsugasaki.jo.net まで。紙の原稿を役員に託されても結構です。

## 手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第41号 2019.8.31

編集・発行人: 森 伸之

年会費 2千円 振込先: 千葉銀行 柏支店 普通 口座番号 3461475